

東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報17

鬼塚遺跡発掘調査概要 I

1978

東大阪市教育委員会

はしがき

鬼塚遺跡は、本市箱殿町に所在する複合遺跡であります。

本遺跡は、縄文時代晚期から弥生時代へ続く集落跡として、数少ない貴重な遺跡であることがわかつておりました。しかしながら、残念なことには、遺跡の範囲内は、すでに住宅が建ちならび、調査を実施する土地は、ほとんど残されておらず、大部分が未解決のまま、今日に至りました。

今回、天理教東神田大教会敷地内の工事中に、弥生土器が発見され、緊急に発掘調査を実施した結果、大きな成果をあげました。このことは、鬼塚遺跡の重要性をさらに高め、今後の文化財保護行政をさらに進めていく必要性を痛感せらるる結果となりました。この意味で本書が、本市の文化財行政の推進と、東大阪市民への文化財の普及に役立てば幸いかと存じます。

最後、調査の実施にご配慮をいただいた天理教東神田大教会の方々、ならびに、厳寒の中、直接作業にあたられた学生諸氏、報告書作成にご協力をいただいた関係各位の皆さま方に感謝の意を表します。

昭和53年3月、

東大阪市教育委員会

教育長 伊東二郎

例　　言

1. 本書は、東大阪市教育委員会が、昭和52年度国庫補助事業(総額2,000,000円、国庫50%、府費25%)として計画し、文化財課が担当し実施した鬼塚遺跡の緊急発掘調査事業の概要報告書である。
2. 調査は、昭和53年1月9日より同年2月16日まで現場作業をおこない同年3月31日をもって整理作業を完了した。調査の実施にあたっては、天理教東神田大教会の関係者の方々、特に嶋田進治郎教長には大変お世話になった他、東大阪市遺跡保護調査会、大弥建設株式会社の協力を得ることができた。記して感謝の意を表したい。
3. 調査は、青野正彦氏の参加を得て、下村晴文が担当した。本書の執筆は、下村がおこない、遺物の実測を松田順一郎、才原金弘、下村がおこなった。トレースを松田が、遺物写真を東大阪市遺跡保護調査会の上野利明氏に依頼した。

本文目次

I 調査に至る経過	1
II 位置と環境	2
III 調査の概要	4
層序	4
第1地区	5
第2地区	6
IV 出土遺物	8
V まとめ	11
VI 観察結果	14

挿図目次

第1図 工事中出土の土器	1
第2図 遺跡周辺図	3
第3図 発掘調査地點	4
第4図 2地区南壁断面図	5
第5図 1地区東壁断面図	5
第6図 1地区・2地区平面図	折り込み
第7図 銅鏡実測図	7

計測表目次

第1表 1地区ピット計測値	6
第2表 2地区ピット計測値	7

図面目次

- 図面 1. 繩文土器・弥生土器実測図
2. 弥生土器実測図
3. 弥生土器実測図
4. 弥生土器実測図
5. 弥生土器実測図

図版目次

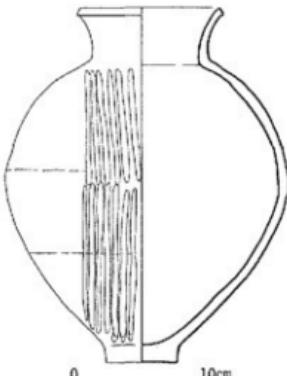
- 図版 1. 調査風景 1. 全景 2. 調査風景
2. 第1地区 1. 全景 2. 石組遺構
3. 第1地区 1. 2土括
4. 第1地区 1. 2繩文土器、土師器出土状況
3. 4弥生土器出土状況
5. 第2地区 1. 全景 2. 全景
6. 第2地区 1. 全景 2. 落ち込み状遺構
7. 第2地区 1.2.3.4.弥生土器出土状況
8. 第2地区 1.2.銅鏡出土状況3.4.弥生土器出土状況
9. 遺物 繩文土器・弥生土器、壺b
10. 遺物 弥生土器壺b、長頸壺
11. 遺物 弥生土器壺a₁、a₂
12. 遺物 弥生土器壺a₂
13. 遺物 弥生土器、器台、鉢C、D、土師器甕、小型器台、鉢

I 調査に至る経過

鬼塚遺跡は、昭和35年枚岡中学校北側に枚岡電報電話公社建設工事中に縄文土器、弥生土器が出土することによって発見された。すぐ西側の枚岡農協建設工事中には大量の弥生土器が発見されるに及んで、縄文時代から弥生時代後期まで続く複合遺跡として周知されるようになつた。⁽¹⁾ 昭和43年に電々公社の北側（箱殿町 535 - 1 地番）敷地を本市教育委員会が発掘調査を実施し、⁽²⁾ 弥生時代後期の壇棺（2基）、縄文晚期～弥生後期の各遺物の発見があった。続いて、昭和47年に市立枚岡中学校の改築工事に伴う緊急調査を東大阪市遺跡保護調査会が実施した。⁽³⁾ 明確な遺構は検出されなかつたが、縄文晚期～弥生後期の各種の遺物の出土を見た。これら一連の発掘調査によって、鬼塚遺跡は一部断絶しながらも、縄文晚期～古墳時代まで続く複合集落としての性格が明らかになりつつあり、特に縄文時代から弥生時代への移行期にある重要な遺跡であることが認識されるようになった。しかしながら、遺跡を含む周辺は宅地化が進んでおり、遺跡の範囲全体が住宅地になってしまっているのは今となっては非常に残念なところであった。

昭和51年9月9日、市内在住の秋山浩三氏より東大阪市箱殿町の天理教東神田大教会（箱殿町558 地番）の敷地内から弥生土器が大量に出土しているとの連絡が市教育委員会文化財課に入つた。さっそく職員が現地を訪れて見ると、樹木移植のために径7～8mの掘り方がおこなわれておらず、掘り上げられた土砂内から弥生土器が検出できた。断面実測など、急換現場での応急作業をおこなつたが、天理教東神田大教会ではこのあと、神殿の改築工事が予定されていることであったため前後策を協議した。その結果、工事予定地が鬼塚遺跡に隣接する地点であること、今回の工事で大量の遺物が出土していることなどから、発掘調査の必要性を認め、発掘調査が完了するまで工事計画を延期してもらうことになり、大阪府教育委員会に緊急調査を申請した。幸いにも国庫及び府費による埋蔵文化財保護地緊急調査補助金の交付を受けることができ、昭和52年度事業として実施した。

発掘調査は、昭和53年1月9日より同2月16日まで現場作業を実施した。調査の実施にあたっては、文化財保護の立場から心よく工事の延期の承諾をしていただきたり、休憩室、湯茶の接待など有形・無形の援助を惜まれなかつた天理教東神田大教会の関係者の方々、特に鳩田進治郎教長には大変お世話になった。心よりお礼申しあげます。また、嚴寒の中、直接作業に従事していただい



第1図 工事中出土の土器

た学生諸氏、何かと援助、協力していただいた東大阪市遺跡保護調査会、大株建設株式会社の方々など、多くの方々に支えられて発掘調査を完了することができた。これらの方々に記してお礼申しあげます。

注(1) 藤井直正・都出比呂志『原始古代の枚岡』1967年

(2) 大阪府立花園高等学校『河内古代遺跡の研究』1971年

(3) 東大阪市遺跡保護調査会『東大阪市遺跡保護調査会年報1』1975年

(4) 直接作業に従事または協力していただいた方々は、青野正彦、和氣 務、中澄幸彦、堀野伸二、高石俊哉、中嶋和彦、清水恵次、藤井哲司、磯部 宏、藤本 隆、安井誠司の各氏である。

II 位置と環境

鬼塚遺跡は、東大阪市猪瀬町に所在する縄文時代晩期～古墳時代の複合遺跡である。

本遺跡の所在する枚岡地区は、南北に長くのびて、北で大東市と南では八尾市と接している。枚岡地区的地形は、生駒山脈と生駒山脈から流れ出る急流性の谷川が、古大阪湾に急激に注ぎ込むことによって形成される大きな扇状地とからなっている。本遺跡も北を流れる長尾川の形成する扇状地中複、標高20～30mの間に位置している。

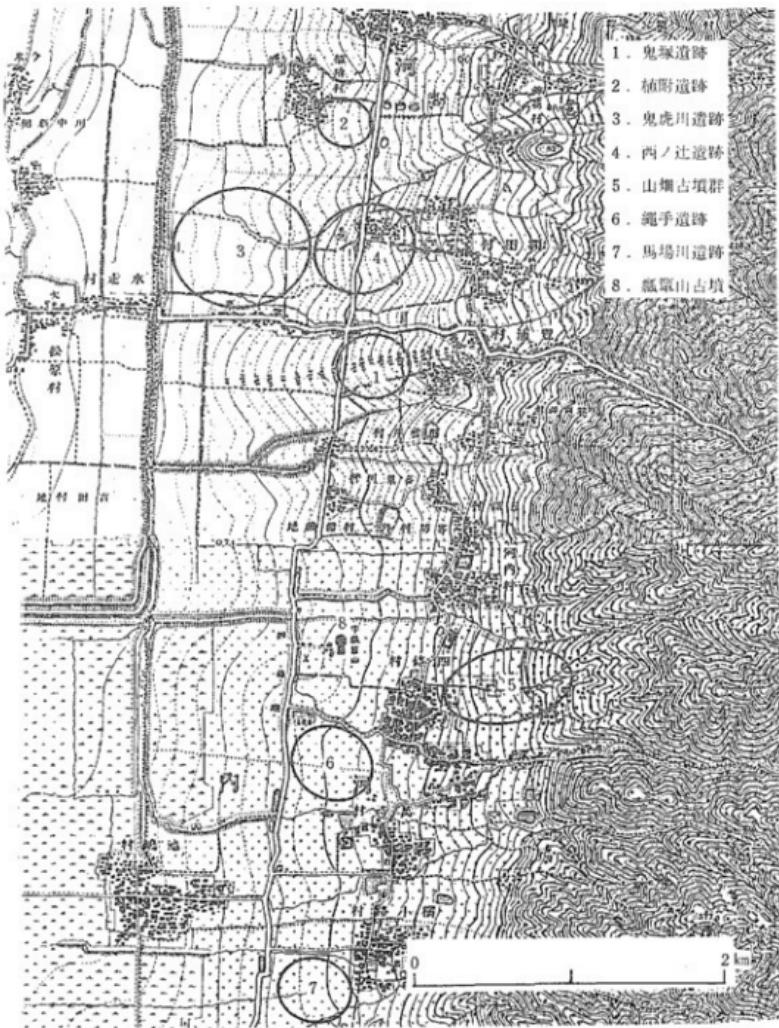
本遺跡の周辺には多くの各時代毎の遺跡が存在する。特に生駒山の自然環境を背景にして、縄文時代の遺跡が数多いのが一つの特徴である。本遺跡に先行して、縄文時代中期末頃より、日下貝塚、⁽¹⁾ 梶手、⁽²⁾ 馬場川遺跡の縄文時代遺跡が扇状地上に形成される。これらの縄文遺跡は、わざかずつ時期的にずれながらも、中期末～晩期初頭まで、鬼塚遺跡の開始直前まで生活が営なまれる。弥生時代に入ると、前期から始まる鬼虎川遺跡、中期からの西ノ辻、⁽⁴⁾ 植附、⁽⁵⁾ 山畠遺跡、⁽⁷⁾ 後期の北烏池遺跡など近接して存在している。本遺跡は、これらの縄文遺跡と弥生遺跡の間を埋めるものとして重要な位置を占めている。特に鬼虎川遺跡など沖積平野に位置する、弥生時代前期初頭よりわざかに遅れて発達する農耕集落とは、遺跡の成立時期、立地の違いなど大きな変化が認められる。

古墳時代にかけても、西ノ辻、鬼虎川、繩手、北烏池遺跡において各種の遺物が発見されているので、活発な生産活動がおこなわれたものと思われる。しかしながら、周辺には古墳時代前期にさかのばる古墳ではなく、5世紀後半の塚山古墳（円墳・径35m）、6世紀前半の瓢箪山古墳（前方後円墳、全長50m）を始まりとして、後期に入って枚岡神社周辺のみかん山古墳群約60基の群集墳である山畠古墳群など数多くの小規模古墳が存在する。

このように、鬼塚遺跡を含めた周辺は、縄文時代以来、人々の生産活動の舞台となった場所であり、その中で、縄文時代以来連綿と続いてきた鬼塚遺跡の位置は、古代史解明の重要なカギをもつものである。

注(1)-(2)-(3)-(5)-(6)-(7) 藤井直正・都出比呂志『原始・古代の枚岡』1967年

(4) 東大阪市遺跡保護調査会『調査会ニュースNo.5』1976年



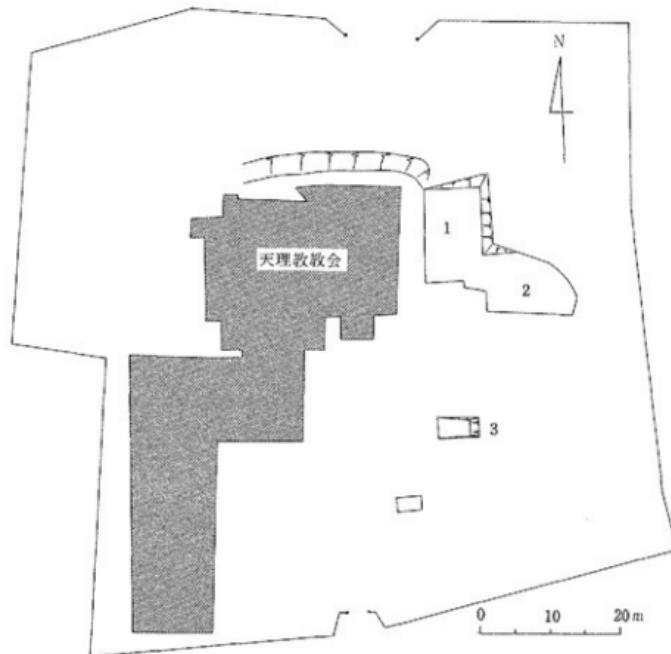
第2図 遺跡周辺図

III 調査の概要

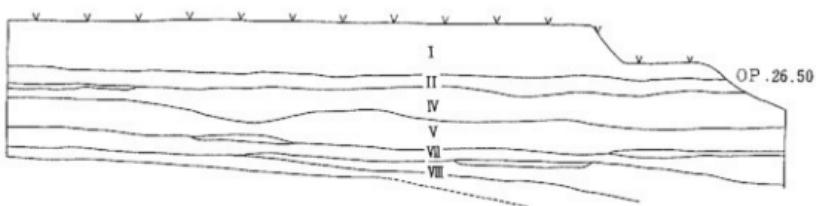
今回の調査地点は、東大阪市箱殿町558 地番で、天理教神殿の東側が対象地であった。調査前は、段々の畑地であったところに約1 mほどの盛土がおこなわれ、その後は空地となっていた所である。まず、樹木移植地点を中心にして、南北に12m、東西7.5 mを第1地区とし、さらに調査中に東へ南北7.5 m、東西11mの範囲を拡張し、これを第2地区と呼称した。調査は、盛土を機械掘削により排除することから始まった。

層序（第4図・5図）

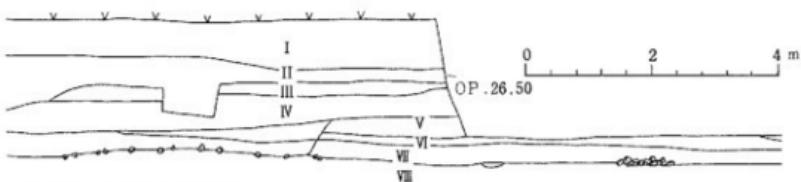
基本的な層序は、上から第I層（盛土）、第II層（旧表土）、第III層（淡茶褐色土）、第IV層（茶褐色土）、第V層（淡黄褐色砂砾層）、第VI層（淡黄褐色砂層）、第VII層（暗褐色粘砂土）、第VIII層（淡黄灰色粘砂土）となる。各層は、東から西へ、北から南へと傾斜し、特に遺構のベース面（第VIII層直上）においては、トレーナー東端と西端で約50cmの比高差が認められた。



第3図 発掘調査地点



第4図 2地区南壁断面図



第5図 1地区東壁断面図

- 第I層 盛土。最近になっておこなわれたもので、約80~100cmの厚さがある。
- 第II層 旧表土。昭和の初期までは畑地であった。
- 第III層 部分的に認められる。旧耕土直下の床土と考えられる。
- 第IV層 厚さ約40~50cmでトレンチ全域に認められる。染め付けの磁器類・陶器などが出土している。
- 第V層 厚さ30~80cmで東から西へかなりの傾斜をもっている。弥生後期の包含層を削りとるように堆積しており、古式土師器が出土している。
- 第VI層 第1地区の東側部分において頗著に認められ、VI層内より後期弥生土器が數十点完形で出土している。第2地区では東へいくに従って、徐々に薄くなっており、トレンチ東端ではほとんど認められない。このことより、流れ込みによる堆積と考えられる。
- 第VII層 弥生後期の遺物包含層。厚さ約20~30cmで全域に及んでいる。
- 第VIII層 遺構のベース面を構成している。弥生前期の遺構と後期の遺構が重複して認められた。ベース面は、各層の堆積状況と同じく、東から西へ傾斜をもち、第1地区の西半分は、後世の造作（天理教会建設の際）を受けており、明確な遺構面は検出できなかった。

第1地区

古墳時代初頭の土塹1カ所と弥生後期のピット、前期のピット、石組遺構を検出した。なお北東隅に後世のものと思われる集石が認められた。この部分はかなりの搅乱を受けているもの

と思われる。

土塙（図版3）

第V層を切り込んでつくられている。南側は、樹木の移植工事によって削り取られているがほぼ南北1.7m、東西1.2m、深さ0.2mの規模と推定できる。土塙内から、蓑、鉢、器台など、古式土器群が一括して出土した。

ピット群（図版2）

第1地区からは、前期・後期、あわせて計13カ所のピットを検出した。各ピットの計測値は第1表のとおりである。前期のピットは総じて浅く、かなり削平されたものと思われ、ピット内には淡褐色土が堆積している。後期のピットは、第7層（包含層）の土が堆積しており、色別は比較的容易であった。ベース直上及びピット内から前期弥生土器と船橋系繩文土器が出土している。

石組遺構（図版2-2）

第1地区と第2地区との境で、南北1m、東西1.5mの範囲に石の堆积が認められた。石は表面が不揃いであるが、挙大の石を中心にして、ベース直上に配されており、断面観察の結果、VII層、VI層の堆积状況にも乱れはなく、弥生後期及びそれ以前につくられたものである。石の表面には、火を受けた痕跡もススなどの付着もなかった。用途は不明。

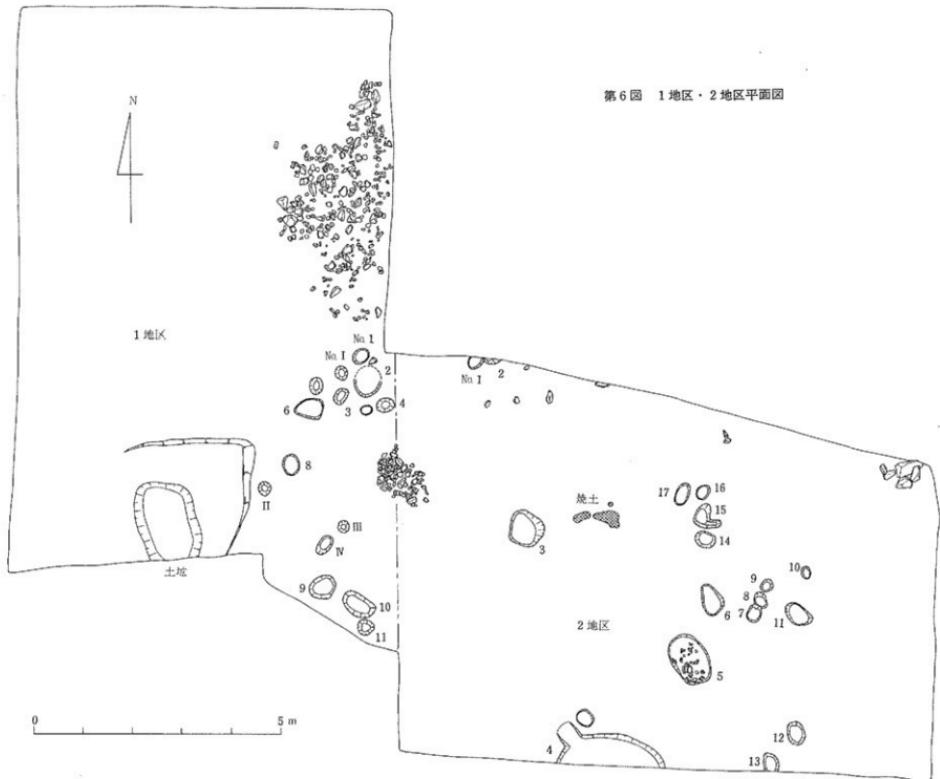
	規 模	備 考		規 模	備 考
1	35×25-8	前期	10	70×40-10	前期(4)(5)の土器出土
3	35×25-15	前期(1)の土器出土	11	30×30-13	前期
4	30×25-17	前期	I	30×25-14	後期
5	30×20-8	前期	II	30×25-21	後期
6	55×40-5	前期	III	25×25-17	後期
8	40×35-5	前期	IV	45×25-12	後期
9	55×45-12	前期			

第1表 第1地区ピット計測値

第2地区

弥生後期のピット17カ所、焼土塙1カ所、落ち込み1カ所を検出した。第1地区で検出した弥生前期の遺構・遺物は、後期によって完全に削平されたものか何ら検出できなかった。第V層上面で完形の弥生土器（蓑・壺など）が數十点散在して出土した。土器類は、すべて横倒し及び倒立した状態で出土し、土器の上部を第V層によって削り取られた状態のものも数多く見られた（図版7）。なお上層の土器とV層内の土器の時期差は認められなかった。これらの土器群の周辺で精査をおこなったが、何らの遺構も検出できなかった。土器群の出土は、現状では遺棄が遺棄されたのち、第V層が堆積し、その後に高所にあった土器が流れ込んだか、第

第6図 1地区・2地区平面図



VII層直上での遺構が廃絶後に第VII層（包含層）をベースとして遺構が存在し、VI層直上で何らかの用途のために土器を散在的に置いたものか、断定することはできない。VII層内より銅鑓が1点出土している。

焼土塗（図版6-1）

第2地区のほぼ中央に径3mの範囲に焼土が認められた。焼土は第VII層上面で認められ、ベース面より20~30cm上になる。焼土の西端で一辺約45cm、深さ15cmの焼土塗が検出できた。壁面は、ほとんど焼けておらず、焼土だけが堆積していた。

落ち込み状遺構（図版6-2）

第2地区の南壁に接して、原形の約1/3程度検出した。落ち込みは、半弧を描き、現状で径2m20、深さ0.15mを計る。

ピット群（図版5）

ピットは散在的に認められたが、ピット内の土とベースとの色別は、非常に困難であり、一つのまとまりとして把握することができなかった。各ピットの計測値は第2表のとおりである。

No.	規 模	備 考	No.	規 模	備 考
1	推定30×30-6	後期	10	25×15-6	後期
2	不明	後期	11	60×35-12	後期
4	35×35-10	後期	12	50×30-8	後期
5	100×75-8	後期3784など…括出土	13	45×35-8	後期
6	65×40-5	後期	14	40×35-4	後期
7	35×25-7	後期	15	50×30-8	後期
8	30×25-10	後期	16	30×25-8	後期
9	30×20-6	後期	17	50×25-5	後期

第2表 第2地区ピット計測値

IV 出 土 遺 物

出土遺物は、銅鐵1点のはかはすべて土器である。土器には縄文時代末の土器の他、弥生時代前期、後期、古墳時代～奈良時代の土器まで各時代の土器類が出土している。

縄文時代船橋系の土器（2～20）

すべて第1地区、南西隅の一角より出土している。口縁端部及び肩部に刻み目を施した凸帶を貼り付けている。器形としては深鉢が大半を占めるが、(7)(10)は浅鉢かと思われる。口縁端の凸帶は端部直下に施すが、刻み目をいれるもの(3),(4),(6),(7),(8),(9),(12),(13),(14)といれないと(2),(11)と区別できる。口縁直下の刻み目には細かく密なもの(6),(7),(13)、大きく粗なもの(3),(4),(14)がある。(4),(5)は同一個体と思われる。

弥生前期の土器（1）

(1) 1点だけがNo.3 ピット内より出土している。(1)は短く開きの少ない口頭部に、幅8mmの削り出しにより凸帶を一条施している。

弥生後期の土器（21～59）

後期の土器は1地区・2地区から大量に出土した。完形の土器は、大半が第7層上面からの出土であった。

広口壺（21～28）

(a) (27)(28) 全体の器形がわかるものはないが、口縁端部を下方に拡張して施文帶とし、ヘラ描き沈線文+円形浮文(28)、横描き波状文+竹管押圧浮文(27)などを施したもの。

(b) (21)～(26) 短く直立する頭部からゆるやかに外反する口縁部が付き、口縁端部をわずかに拡張するもの。口縁端部をわずかにつまみあげ、受口状口縁の影響のあるものもある(26)。頭部と体部との境に菱形の棒状浮文を貼り付けるもの(26)、ヘラ描きによる山形文(22)など、記号文を配するものなどがある。

長頸壺(29)～(31)

復原できるものは5点出土しているが、図化できたものは3点である。外上方にのびる直口の口縁部をもつ(29)は、端部をわずかに立ちあがらせている。(30)は、胴部下半にヘラ先による刻み目を4か所に入れており、同様のものがもう一点出土している。(図版10-30')。(22)もヘラ描きの記号文を胴部上半に入れている。

壺(32)～(45)

(a₁) 「く」の字に外反する口縁部をもち、器高18cm以下の比較的小型で、口縁径が腹径を上まわるもの。口縁部をわずかにつくるもの(32)(44)、丸く終るもの(36),(39),(36),(37)などがある。(33)は体部上半の叩き目が左上りで、他の甌の叩き目とは逆方向についている。胴部下半は逆方向の叩き目で叩き目原体も異なるものを使用しているなど特異な土器であるが、他の調整法や胎土、色調など河内地方の甌と異なることはない。

(a2) 「く」の字に外反する口縁部をもち、腹径が口縁径を上まわるもので、器高24cm以上の大型の蓋である。端部を丸く、水平方向に拡張するもの(40)、わずかに面をつくるもの(40)、(43)、(45)などがある。

(b) 受口状口縁をもつもの。口縁外側に面をつくり、端部を平坦におわらせているもの(38)、わずかに丸みをもつもの(39)がある。

鉢52～54・56～58

(a) 54「く」の字状に外反する口縁部をもち、口縁直下に半円形の把手を貼り付ける大型の鉢である。

(b) 53 受口状口縁をもち、端部を平坦におわらせているもの。

(c) 55、57 外反する口縁部をもち、端部をわずかに面をつくるもの。

(d) 52、56 内寄ぎみに直口して終る口縁部を有する。52は内面下半を削り、底部を穿孔する。

高杯48～51

斜上方にのびる杯体部より外反する口縁部が付く、浅い杯部をもつもの。脚部は、脚柱上部まで中空になり、ひろがった裾部をつけたものが多く、3個の円孔を穿ったものが大半を占める。(51)

器台46、47

円筒形の体部に二段に3個の円孔をもつ通常のもの(46)と、口縁部を大きく開け、端部を下方に拡張し、凹線文+棹状浮文を配する。体部に4条～5条の沈線文を配し、装飾性に富むものである(47)。

土製台58

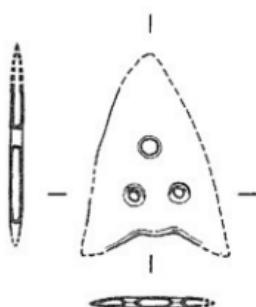
小型の鉢かもしれないが、脚部裾のひろがり、内面の不整形なところから、上部に平坦面をもつミニチュアの脚台と考えた。

銅鏡(第7図)

弥生後期の包含層内より銅鏡が1点出土している。中央の鏡はなく、先端を丸くおわらせる扁平な無茎式銅鏡で三個の円孔を穿つ。長さ2.9cm、幅2.8cmを計る。保存状況は良好でなく、細部の詳細な形態については不明であるが、いまのところ、これに類似する銅鏡の報告例はない。

手焰形土器61

器の上下を欠いているが、手焰形と思われる。胴部にヘラ先による刻み目を施した凸帯を



第7図 銅鏡実測図(31)

めぐらす。

他地域からの土器^{59)、60)}

鶴は受口状口縁の土器で、端部外面にこまかな掘掻き波状文を施す。内外面ともティネイなヘラミガキを施す。

鶴は所謂、酒津式土器である。口縁端を垂直に立ちあがらせ、外側に面をつくる。外側の面に10条の掘凹線を施す。

V ま　と　め

今回の調査で、三時期の遺構、遺物を検出した。縄文晩期末～弥生前期初頭・弥生後期・古墳時代初頭の三時期である。三時期の遺構は、断続的に続き、出土遺物からも明確に区別することができた。ここでは、時期別に問題点を整理してまとめにかえておきたい。

1. 縄文晩期末～弥生前期初頭の遺構・遺物について

この時期の遺構は、淡黄灰色粘砂土をベースにして遺構を構成するが、このベースは弥生後期のベースと共に通している。このことから、弥生前期の遺構面は実際はもう少し上にあったものが、弥生後期に削平されたものと考えられる。この結果、弥生前期の遺構は残存部が浅く、かろうじてピットだけを検出し得たのではないかと思われる。前期と後期の区別は、ピット内の包含層を色別することによって比較的容易におこなうことができた。ピット内及びベース面直上より、船橋系の縄文土器と弥生前期（中）段階の壺が伴出した。両者は、明らかにセットとしてとらえうるものである。畿内弥生土器前期の編年は、佐原真氏により時期差を伴う編年序列がなされている。¹¹⁾これに従えば、今回の削り出し突堤をもつ壺は、（中）段階に属し、前期（吉）段階より一時期後出のものである。

本遺跡が位置する生駒山西ろく地域は、伝統的に縄文人の勢力範囲としてとらえうるところである。この地域に弥生文化が波及するのは鬼塚遺跡が最初であり、それが前期の（中）段階という一時期遅れて開始されることとは、縄文人ととの摩擦をさけるという意味をもつものかどうか非常に注目すべき事実であると思われる。

本遺跡は、縄文後期末頃から生産活動が始まり、晩期末までの継続が確認されている。今回の出土土器の中にも（6）のように縄文土器の影響を大きく残す小型の壺がある他、昭和43年の調査で本葉文の文様をもつ壺などが出土しており¹²⁾、縄文系の技術が土器の中に多く認められる。このように縄文文化と弥生文化の接触を考える上で、鬼塚遺跡は重要な位置を占めている。

2. 弥生後期の遺構・遺物について

後期の遺構は、柱穴、落ち込み状の遺構を検出しているが、今回の調査範囲のみでは、集落内での性格、位置づけは困難である。しかしながら、昭和43年、47年の調査においても、後期の遺物包含層が発見されており、かなり広い範囲に分布するものと思われる。また、今回の調査範囲内において、土器がほぼ完全な形で散在的に出土し、付近に明確な遺構を伴なわない状況で検出した。これらの事実は、生駒山西ろくの扇状地上の遺跡においてしばしば認められるが、二次堆積という状態だけでは明確に説明しきれないものがあり、今後周辺地を含めた範囲の精緻な調査が要求される。

出土遺物は、弥生後期前半の一括資料として取り扱うことができる。壺は（b）の形態をもつし

のが圧倒的に多く、口縁端部を文様で飾る(a)タイプの壺には完形のものはなく、数量的にも少ない。同様の現象は、西ノ辻遺跡⁽⁵⁾や馬場川遺跡⁽⁶⁾など後期の遺跡に通有である。ただ(b)の壺は、口縁端部をわずかにつまみ上げ、受け口状にする傾向が認められ、後期後半の特徴の一つとされる受口状技法へのつながりがうかがわれる。

壺は、大型の(a₂)タイプと小型の(a₁)のタイプに大別でき、これは後期後半の北島池遺跡の大型の壺と小型の壺にまで統くものであり、⁽⁷⁾少なくとも後期の壺において、器種の構成上、用途別に明確に区別されるものである。(a₁) (a₂)の壺の製作手法には、体部の上位・中位・下位に分割手法の叩き目が認められる。壺⁽⁸⁾、⁽⁹⁾のように連続ラセンタキ手法へ統くものの認められるが、圧倒的に分割手法による叩き目であり、西ノ辻E式に通じるもので、畿内V様式前半に通有のものである。

3. 古墳時代初頭の遺構・遺物

遺構としては土塙1カ所を検出したのみであるが、土塙内より良好な土器を一括出土した。効の壺は、口縁端部をつまみ上げ、外側にわずかに面をつくり、体部外面にこまかに叩き目を施すのを特徴とするところから、明らかに河内地方の庄内期（上田町Ⅱ式）の延長上に位置する土器であり、定形化された布留式の壺とは一線を画する土器である。しかしながら、今回図化できなかったけれども、口縁端部を内面に肥厚させる、定形化した古式土師器（小若江北式）⁽¹⁰⁾を伴出しておらず、伝統的な河内地方の古式土師器壺の位置を与えることができるであろう。

良好な小型器台が出土している。この形態の器台は、瓜生堂遺跡にも類例があり、小若江北式の杯底部に貫通孔をもち、器受部、裾部ともに開く形態とは形式上差があると考えられる。このことより、小若江北式に先行し、布留式でも初頭に位置づけられるものと思われる。

今回の調査では、三時期の良好な資料を得ることができた。今後、以前の調査資料との比較検討をおこない、さらに空白を埋めていく努力をおこなわなければならぬ。

注(1) 佐原 真・田辯昭三 「弥生文化の発展と地域性」日本の考古学Ⅲ、河出書房、1967年

佐原 真 「山城における弥生式文化の成立」『史林』第50巻第5号、1967年

(2) 板付I式、畿内第I様式（古）の段階では、縄文人と弥生人の住み分けがおこなわれており、（中）段階以後交流するという考え方があり、筆者の考え方もほぼ同じである。縄文最終末の船橋系縄文土器の時期には、すでに畿内でも弥生文化が伝播しており、弥生時代が開始されていた。鬼塚遺跡は、縄文人の勢力範囲であったために弥生文化の波及が遅れたものと考えておきたい。また今回出土の船橋系土器にも弥生土器の影響が大きく認められる。

中井一夫 「前期弥生文化の伝播について」『櫻原考古学研究所論集』1975年

(3) 大阪府立花園高等学校「河内古代遺跡の研究」1971年

(4) 同上

東大阪市遺跡保護調査会『東大阪市遺跡保護調査会年報Ⅰ』1975年

- (5) 小林行雄「大阪府枚岡市額田町西ノ辻遺跡Ⅰ地点の土器」弥生式土器集成資料編合冊1968年

- (6) 東大阪市教育委員会「馬場川遺跡Ⅲ」1975年

東大阪市教育委員会「馬場川遺跡Ⅳ」1977年

- (7) 大阪府立花園高等学校『河内古代遺跡の研究』1971年

この中でもP71の図-5の(12)-(15)の肩の張る大型の甕a₂タイプと(19)-(24)の肩の張らない、小型の甕a₁タイプとに区別することができる。

- (8) 小林行雄「大阪府枚岡市額田町西ノ辻遺跡D・E・F・H・地点の土器」弥生式土器集成資料編合冊1968

- (9) 伝統的というのは馬場川遺跡の上層で出土した甕(第9図-91)が製作手法(外面の刷毛目、内面の削り手法の一般化)上において、定形化する布留式土器の初頭に位置づけられるものと形式上差は認められても、両者とも共伴する甕(口縁端部内面を肥厚させる)が定形化された布留式の甕であるところから、総的には同一時期のものであるところからいう。

東大阪市教育委員会「馬場川遺跡Ⅴ」1976年、P.15 第9図-91

- (10) 萩田昭次「瓜生堂遺跡」中央南幹線内西岩田瓜生堂遺跡調査会 1971年、図版三二-1

- (11) 村川行弘「小若江遺跡出土の土器」土師式土器集成本編1 1971年

VI 観察結果

縄文土器・弥生土器

器形番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	胎土・色調・備考
縄 1	復原口 径 14.8	比較的短く開きの少ない口頭部に外反する口縁部をもち縁部はわずかに面をなす。	口縁部内外面ともナテ、頭部以下ヘラミガキを施す。 頭部に削り出しによる幅8mmの凸帯と一束の沈鉢	こまかに長石粒、金雲母を含む。 1地区No.3ピット内出土
縄 4	復原口 径 16.5	わずかに外反する口縁部をもち、口縁部と肩部に割み目のある凸帯を貼り付けける。	口縁部内外面はティネイにナテ調整を施す。	金雲母・角閃石・長石を含む。淡褐色。 1地区No.9ピット内出土
縄 5		深鉢の体部下半の破片と思われる。	内外面はティネイナテ、外面は右脇りの水平方向に削り調整が施される。	角閃石・金雲母を含む。暗褐色。 1地区No.9ピット内出土。 (4)の深鉢と同一個体。
縄 3		わずかに内傾す口縁部をもち口縁部と肩部に割み目のある凸帯を貼り付けている。	内外面ともティネイナテ調整。内面に刷毛状の痕跡がわずかに認められる。	角閃石・金雲母・長石粒を含む。暗茶褐色。
縄 6	復原口 径 9.4	肩部はほとんど張らない小型のもの。口縁端に断面の丸い割み目のある凸帯を施す。 割み目をへら先により、こまかく刺突する。	体部外面を下へ上へ削り上げる。 内面はナテ調整を施し指押えが認められる。	2~3mmの大長石・石英を多く含み、角閃石・金雲母をわずかに含む。 淡褐色。
縄 2	復原口 径 10.8	外上方にのびる口縁部をもつ。縁部直下に割み目のない凸帯をもつ。	内外面ともナテ調整	角閃石・長石粒を含む。明褐色。
浅 7		浅鉢の口縁部。口縁端部から少しはなれて、割み目のある凸帯を施す。口唇部にも割み目を施す。	内外面ともナテ調整	角閃石・金雲母を含む。明褐色。
縄 13		深鉢の口縁部か。口縁端部から少しはなれて、割み目のある凸帯を施す。	凸帯直下より貝殻による条痕がのこる。内面はナテ調整。	角閃石・金雲母・長石を含む。明褐色。
縄 15		深鉢の肩部の破片。割み目のある凸帯をもつ。	外面は、凸帯以下は削り調整。 上位はナテ調整を施す。内面はナテにより調整。	角閃石・金雲母を含む。茶褐色。

弥生土器

縄 27	復原口 径 25.0	外反する口縁部の端部を上下に拉張し、荷揚波状文(4本)+管文押印円形浮文の文様を施す。	内外面ともナテ調整	角閃石・金雲母を多く含む。淡褐色。
---------	------------------	---	-----------	-------------------

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	胎土・色調・備考
壺 a	28	口 径 25.0	外反する口縁部の端部を斜め下方に拡張し、三条の沈線文十円形浮文の文様を施す。	頭部外面はタテヘラミガキ、内面は刷毛目(6本/cm)。	角閃石、金雲母を多く含む。 淡褐色 口縁部内面にわずかに朱の付着が認められる。
壺 b	21	口 径 10.4 器 高 26.3	わずかに直立する頭部にゆるやかに外反する口縁部をもち腹部は面をもっておわる。 器体中位に最大径をとり、小さな平底をもつ。	口縁部の外面はナデ調整。外部外面は刷毛目のち、タテヘラミガキ。内面は右廻りの粗い刷毛目(4本/cm)	金雲母、角閃石、石英粒を含む。 明褐色 体部の中位より下半にススが付着。
壺 b	22	口 径 14.0 器 高 24.3	わずかに直立する頭部にゆるやかに外反する口縁部をもち腹部は面をもっておわる。	口縁部、体部外面はタテヘラミガキ。口縁部内面は右廻りのヘラミガキ。内面は右廻りの刷毛目(3本/cm)をナデ調整により消している。 頭部にヘラ先による山形文状の記号文を施す。	2mm大的長石結が顯著で角閃石、金雲母を含む。 淡赤褐色
壺 b	23	口 径 13.0	わずかに直立する頭部に外反する口縁部をもち、端部は面をもっておわっている。 器体中位に最大径をとり、やや長手の体部がつく。	口縁部外面はナデ調整、内面は刷毛目のちナデ調整を施す。体部外面上部は刷毛目ナデ、下位はヘラミガキナデをおこなう。 体部内面はナデ調整で指揮えがみられる。下位は刷毛目(9本/cm)	角閃石が顯著で金雲母、長石結をわずかに含む。 淡茶褐色
壺 b	24	口 径 15.0 器 高 22.0	短く直立する頭部にゆるやかに外反する口縁部をもち、腹部は面をもっておわる。 器体中位に最大径をとり、球形の体部に平底の底部がつく。 頭部と体部の境に1カ所、変形の浮文を貼り付ける。	口縁部、体部ともに外面は刷毛目ナデ調整、内面は右廻りの刷毛目(4本/cm) 接合底を明瞭にこす。	2~3mm大的長石結が顯著に見られ、角閃石、金雲母を含む。 赤褐色。 体部の中位より下半にススの付着が認められる。
壺 b	25	口 径 13.2 器 高 20.3	短く直立する頭部にゆるやかに外反する口縁部をもち、端部は面をもっておわる。 器体中位に最大径をとり、やや扁平な体部に平底の底部がつく。 頭部外面にヘラによく刷毛目を二列施す。	口頭部はこまかに刷毛目(8本/cm)、体部を刷毛目ナデヘラミガキ。頭部内面は右廻りの刷毛目(6本/cm)、体部内面は刷毛目ナデ調整。	角閃石、金雲母を含む。 茶褐色。
壺 b	26	口 径 12.7	わずかに直立する頭部にゆるやかに外反する口縁部をもち、端部は面をもっておわる。 器体中位に最大径をとる。 やや扁平な体部がつく。	頭部、体部外面ともタテヘラミガキ。接合底をこす。 内面はナデ調整をおこなう。	角閃石、金雲母を含む。 明褐色。
長 颈 壺	29	口 径 18.4 器 高 26.1	外上方に開く口頭部から口縁端部はわずかに直立して丸くおわる。 器体中位に最大径をとる。球形の器体に小さな上げ底の底部がつく。	頭部外面を下から上への刷毛目(7本/cm)、体部外面は叩き目+刷毛目ナデ調整。内面はナデ調整。	2~3mm大的長石結が顯著で、角閃石、金雲母を含む。 淡赤褐色 体部中位下半にススが付着。
長 颈 壺	30	口 径 9.8 器 高 16.8	外上方に開く短い頭部で、端部は直口である。 器体中位に最大径をとる。 体部下半にヘラによる刻み目を4カ所施す。	頭部外面をタテヘラミガキ、内面を刷毛目(8本/cm)、体部外面を叩き目(2.5本/cm)+タテヘラミガキ、内面をナデ調整。	石英粒、金雲母、角閃石を含む。 茶褐色。 頭部下半に刻み目を入れる長颈壺がもう一点出土している。(図版10-30°)

器形	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	出土・色調・横考
甕	32	口 径 11.8 器 高 19.5	ゆるやかに外反する口縁部をもち、縁部は面をもっておわる。深面に一束の条線をのこす。	体部外面は右上りの印き目を施す。印き目は口縁部にまでおこなれ、タカキ出しによる口縁部つくり出しの傾向。内面は、刷毛目+ナダ調整。	金雲母、角閃石を含む。明褐色。
甕	33	口 径 10.9 器 高 18.0	「く」の字に曲折し外反する口縁部は、縁部を丸くおわせている。器体の中位よりやや上に最大径をとり、やや肩の張る部体に平底の底部がつく。	口縁部外面をナダ調整。内面を刷毛目+ナダ調整。体部外面を上位を右下りの印き目(25/cm)、下位を原体を変えて右上りの叩き目(3.5本/cm)を底部まで入れる。内面は刷毛目+ナダ調整。接合痕をのこす。	砂粒を多く含む。赤褐色。体部の上半に黒斑。
甕	34	口 径 14.2	やや粗雑な感じをもつ虎。ゆるやかに外反する口縁部は、縁部を丸くおわせている。肩部をあまり張らずに底部に移行する。	体部外面に粗い(2.5本/cm)印き目を施すが、器皿表面はあまり整えられていない。内面は刷毛目で調整する。	金雲母、角閃石を含む。茶褐色。同タイプの甕がもう一点既出土している。
甕	37	口 径 12.8 器 高 11.8	小堅の虎。ゆるやかに外反する口縁部は、縁部を丸くおわる。肩部の張らない部体に小さな突出したような平底の底部をつける。	右上り印き目を体部の接合部を境にして、若干方向を変る。内面は、刷毛目をナダ調整により消していく。	金雲母、角閃石、長石を含む。風化が激しい。淡褐色。第2地盤、No.5ピット内により出土。
甕	41	口 径 15.9 器 高 16.9	外折したのち外反し、縁部は角張っておわる。口縁が旋抜を上回る小型のもの。器体中位より上に最大径をとり、肩の張らない部体に上げ底の底部がつく。	口縁部内外面ともナダ調整。体部外面は上から右上がり、水平方向、右上がりの印き目+刷毛目。内面はナダ調整を施す。	1mm前後の長石粒。金雲母、角閃石を含む。淡赤褐色。体部中位に幅3cmにわたって帯状のヌスが付着。
甕	44		「く」の字に曲折し外反する口縁部の縁部は面をもっておわる。縫面にはヨコナナフジの跡の条線がある。器体の中位に最大径をとり、平底の底部がつく。	口縁部内外面ともナダ調整。体部外面は右上りのタカキ目+下位の印き目の方向はわざかに異なる。内面を左廻りの刷毛目(12本/cm)	角閃石、金雲母、石英、長石を含む。赤褐色。
甕	40	口 径 16.0 器 高 25.0	「く」の字に曲折し外反する口縁部は縁部を面をもっておわる。器体中位より上に最大径をとり、肩のわざかに張る高窓の器体に平底の底部がつく。	口縁部内外面ともナダ調整。体部外面は右上りの印き目を下位の接合痕を境にして、わざかに方向を変える。内面は上位を上→下、中位を水平方向の刷毛目(7本/cm)、	金雲母、角閃石、石英を含む。淡茶褐色。体部の上位を陥く全休と口縁部外面にヌスの付着が見られる。
甕	43	口 径 15.2 器 高 23.5	「く」の字に曲折し外反する口縁部は、縁部は面をもっておわる。器体の中位よりやや上に最大径をとり、わざかに肩の張る器体に平底の底部がつく。	口縁部内外面ともナダ調整。体部外面上位を右上り、中位を水平方向、下位を右上りの印き目(2.5本/cm)と接合痕を境にして方向を異にする。体部内面は水平方向の刷毛目(6本/cm)	金雲母、角閃石、石英を含む。淡褐色。
甕	42	口 径 19.9 器 高 29.2	「く」の字に曲折し外反する口縁部は縁部は丸く、水平方向に抵抗しておわる。器体中位に最大径をとり、高窓の器体に平底の底部がつく。	口縁部内外面ともナダ調整。体部外面は右上りの印き目+刷毛目+ナダ調整を施す。接合部を境にわざかづつ印き目の方向が異なる。	金雲母、角閃石、石英を含む。赤褐色。体部中位下半に幅8cmにわたって帯状にヌスが付着

器物番号		法量	形態の特徴	手法の特徴	地質・色調・備考
器 a _a	45	口 径 15.2 器 高 23.5	「く」の字に曲折し、外反する口縁部の端部は面をもっておわる。器体の中位に最大径をとり、両側の体部に平底の底部がつく。	口縁部内外面ともナテ調整。体部外面は、接合部を境にして上位を右上り、中位をわずかに右下り、下位を右上りの叩き目(2本/cm)。内面を刷毛目+ナテ調整。	2~3mmの大長石が顯著。金雲母、角閃石を含む。赤褐色。体部中位に幅8cmにわたって帶状にススの付着。
器 b	39	復原口 径 13.2	外反したのち口縁部をつまみあげて空口状に仕上げ、外面に面をつくる。器体の中位より上に最大径をもち肩の張る体部をもつ。	口縁部外面は刷毛目+ナテ調整。内面はナテ調整。体部外面は右上りの叩き目、内面は斜下方→斜上方の刷毛目を施す。	長石、石英が顯著に認められ、角閃石、雲母が若干みられる。明褐色。
体 a	54	口 径 17.3 器 高 9.0	「く」の字状に曲折しむずかに外反する口縁部は、端部を角張っておわる。口縁下に半円形の把手を貼り付ける。	口縁部、体部ともナテ調整を施す。	1~2mmの大長石が顯著。金雲母、角閃石を若干含む。
体 b	53	復原口 径 16.4	外反したのち口縁端部をわずかにつまみ上げ、端部を平坦におわらせる。	口縁部内外面ともナテ調整。体部外面は刷毛目+ナテ調整。内面はナテ調整を施す。	金雲母、角閃石を含む。淡褐色。
体 c	57	口 径 21.6 器 高 9.5	外反する口縁部に端部は面をもっておわる。深い椀形の体部に上げ底の底部がつく。	口縁部内外面ともナテ調整。体部上位を水平方向、下位をタチ方向のヘラミガキ。内面をタチヘラミガキ。	2~3mmの大長石、石英粒を含む。角閃石、金雲母を若干含む。赤褐色。
体 d	56		内面ざみに直口しておわる口縁部。椀形の体部に上げ底の底部がつく。	外面はナテ調整。内面は刷毛目+ナテ調整。底部をひねり出すように突出させ、外間に指圧痕を施す。	長石、石英、金雲母を含む。茶褐色。
体 d	52	口 径 11.9 器 高 10.5	直口する小型の体で、底部に円孔を穿つ。	外面ナテ調整。内面削り調整を施す。	金雲母、角閃石を含む。淡赤褐色。
高 杯	48	復原口 径 21.4	斜上方にのびる杯体部より外反する口縁部が付く。端部は面をもっておわる。	口縁部外面をナテ調整。内面へラミガキ調整。体部内外面ともへラミガキ調整を施す。	こまかな長石粒、金雲母を含む。明褐色。
器 古	46	口 径 18.0	上方にややすむ円筒形の体部に外方に大きく開く口縁部を付け、端部を下方に拡張させる。端面に4条の四瓣文十三横一对の筋状浮文を貼り付ける。脚部に沈線文(4~5)条をめぐらし、三個の円孔を穿つ。	口縁部、体部とも外間にタチヘラミガキ。口縁内面はタチヘラミガキ。体部内面下半はナテ調整を施す。	金雲母、角閃石、石英を含む。淡赤褐色。口縁部、体部外面と口縁部内面にはスリップ状のナックルがおこなわれる。

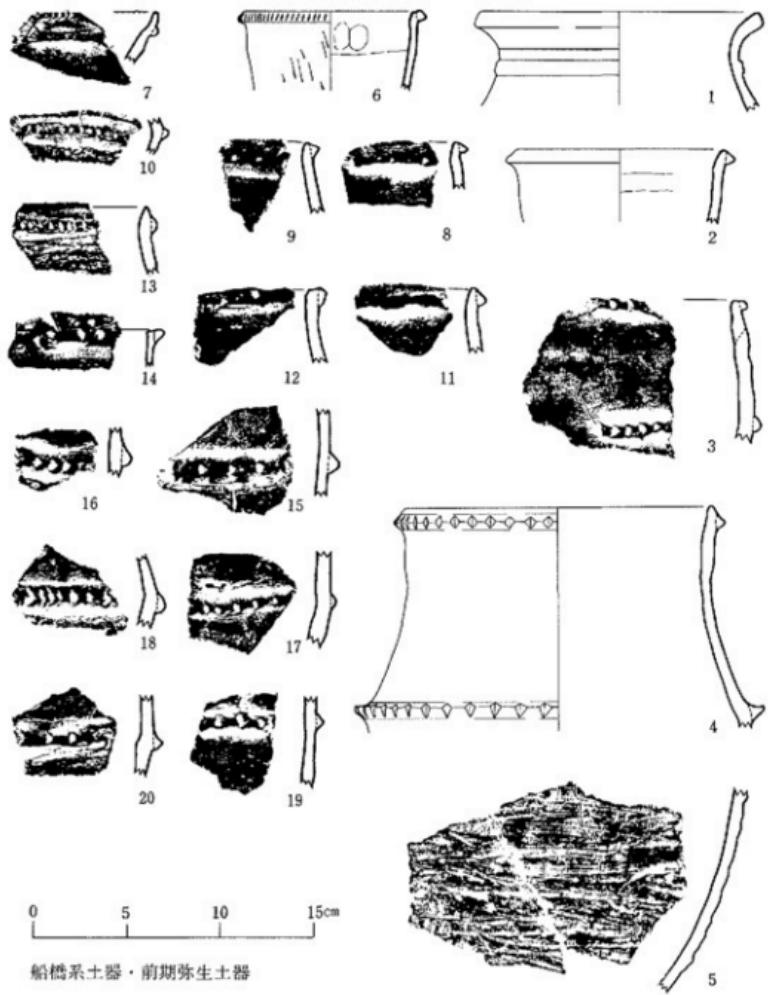
土 師 器

器	62	口 径 14.2 器 高 18.5	球形の体部に「く」の字に曲折し外反する口縁部を付ける。口縁端部をわずかにつまみあげ、外側に面をつくる。器壁は3mm以下の薄く仕上げられている。	口縁部内外面ともナテ調整。体部上位はこまかな叩き目(8本/cm)+刷毛目(12本/cm)+ナテ調整。下位はナテ調整。体部内面は上位を左廻り、下位を下→上の削り調整を施す。	金雲母、角閃石、長石、石英を含む。茶褐色。1地区土松内出土。
---	----	----------------------------	---	---	--------------------------------

測定番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	粘土・色調・備考
小型器合 63	口 径 10.8 器 高 8.8	小さく拗曲する器受部に、わずかに内傾する直口の口縁部をもつ。脚部は大きく開き、稜端部は丸くおわる。4個の円孔がみとめられる。	脚部と器受部の接合ヶ所にナナメ調整が施こされるが、内外面ともテイネイなヘラミガキがおこなわれている。脚部は内面を刷毛目ナナメ調整。	金雲母がみとめられるが表面にはほとんど妙粒をみとめない。 淡赤褐色。 1地区土壇内出土
鉢 65	口 径 11.0 器 高 7.0	丸底の底部に複形の体部が付く直口の鉢である。全体に粗雑な感じを受ける。	体部外側は刷毛目ナナメ調整で指揮との痕跡がのこる。内面は刷毛目ナナメ調整。	2~3mm大的長石粒が顕著に認められる。金雲母、角閃石を含む。 赤褐色 1地区土壇内出土
鉢 64	根原口 11.2 器 高 7.0	わずかに外反する口縁部の端部は丸くおわり、複形の体部に小さな平底がつく。	体部、内外面ともナナメにより調整を施す。	2~3mm大的長石粒が顕著。 金雲母、角閃石を含む。 赤褐色。

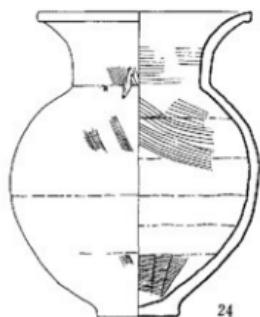
図
面・図
版

図面1 繩文土器・弥生土器

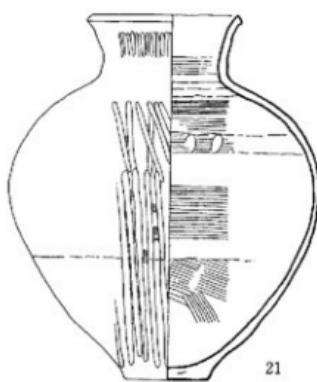


船橋系土器・前期弥生土器

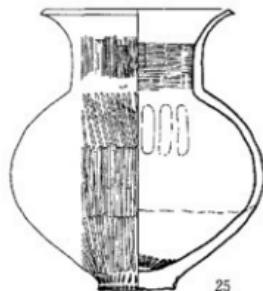
図面2
弥生土器



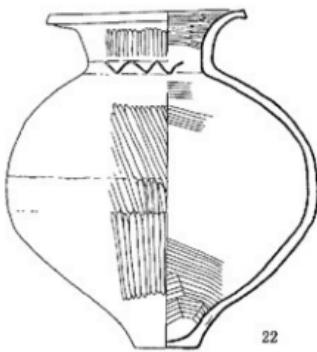
24



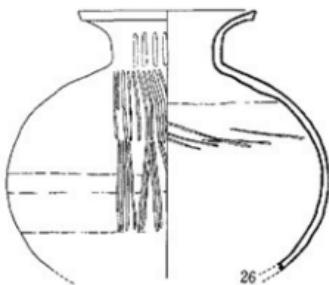
21



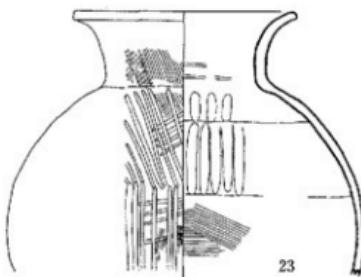
25



22



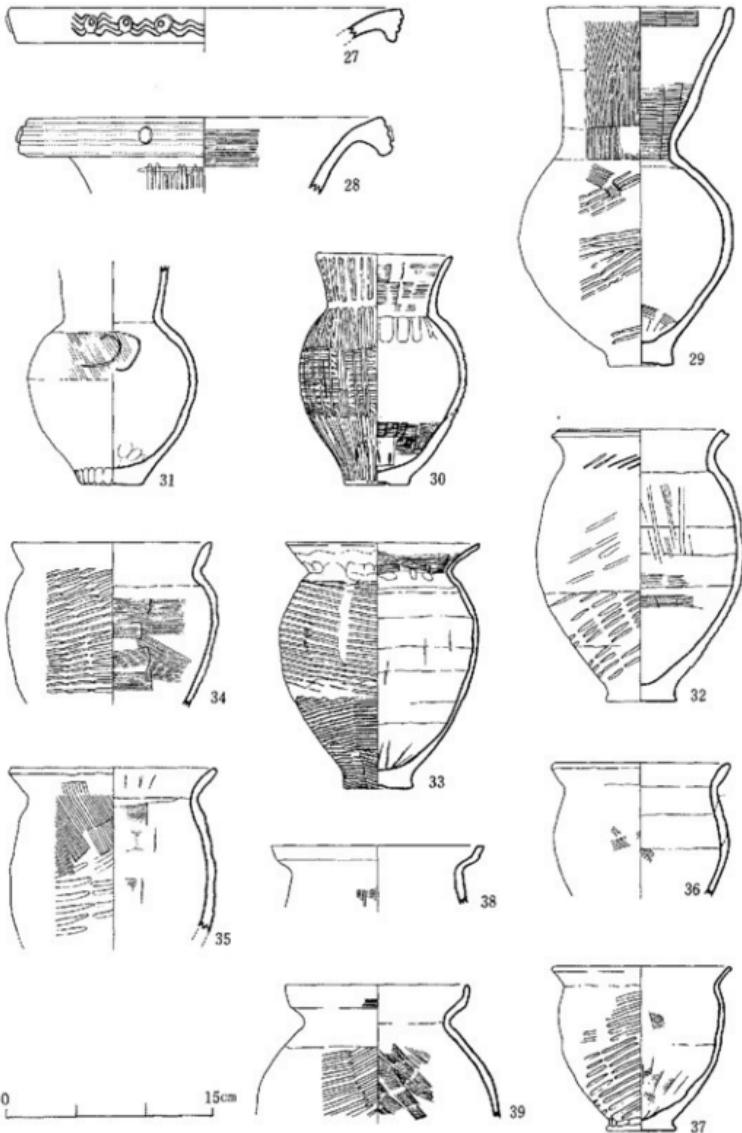
26



23

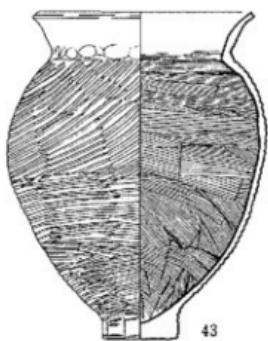
0 10 20cm

弥生土器壺b

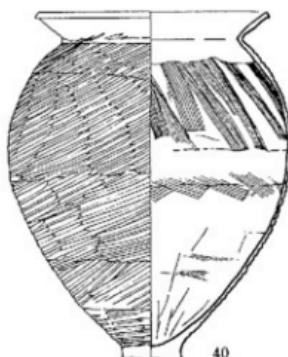


弥生土器壺 a、長頸壺、甕 a。

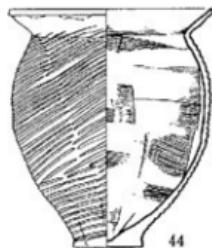
図面4
弥生土器



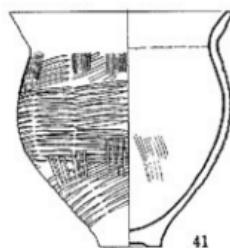
43



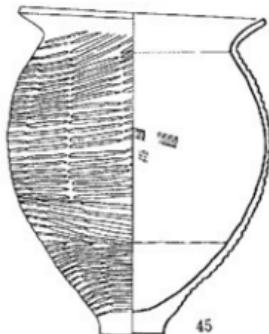
40



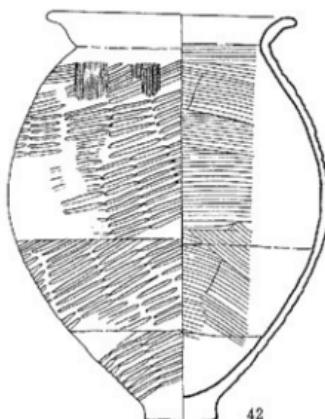
44



41



45

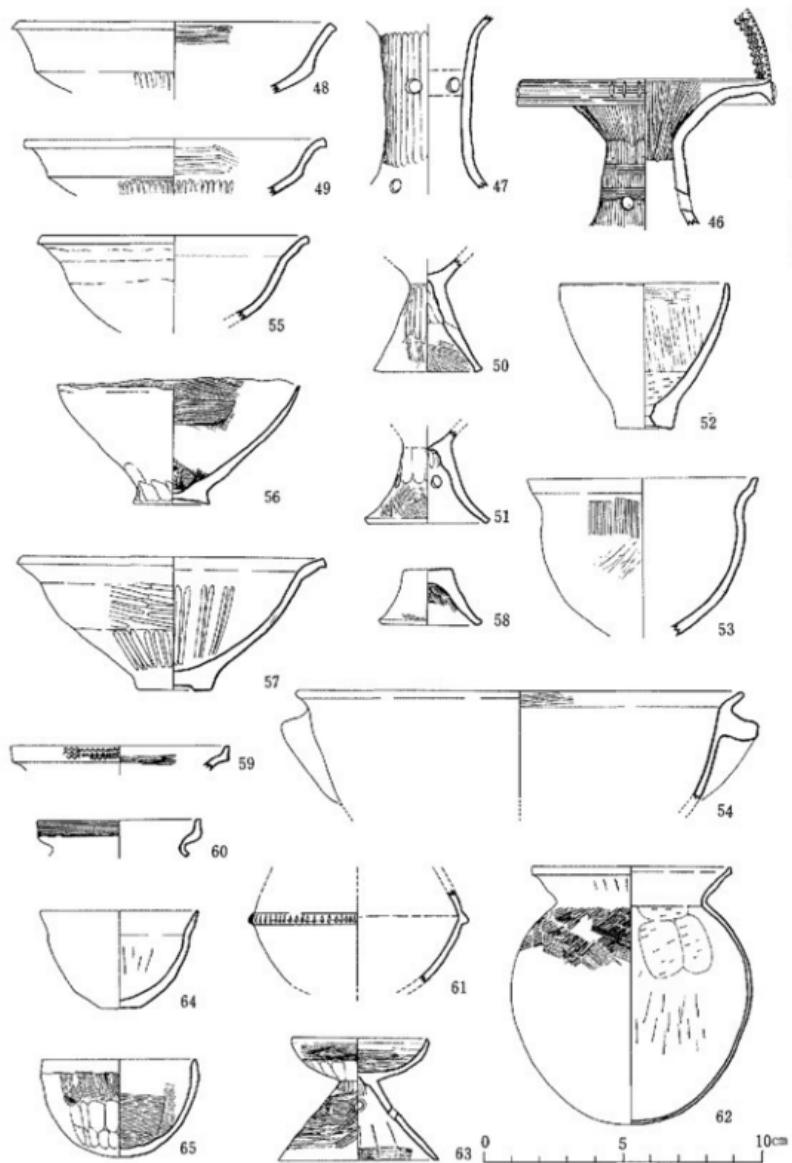


42

0 10 20cm

弥生土器裏 a₁, a₂

図面5
弥生土器・土師器



弥生土器鉢、器台、高杯、土師器甕、小型器台、鉢



1. 調査地全景



2. 調査風景



1. 全景



2. 石組遺構



1. 土塚內土器出土狀況



2. 土塚內土器撤去後

図版 4 第1地区



1. 土坑内土器出土状況



3. 弥生土器出土状況



4. ビット内繩文土器出土状況



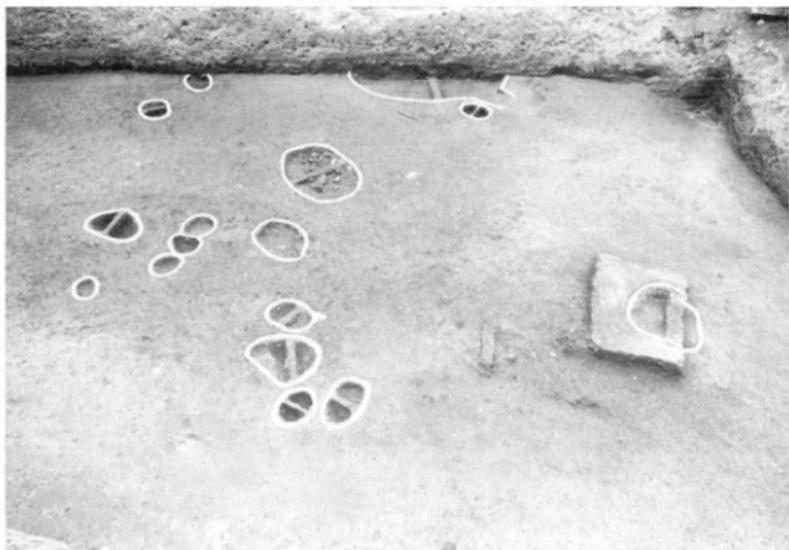
2. ビット内繩文土器出土状況



1. 策1地区から第2地区を望む



2. 第2地区全景



1. 第2地区全景



2. 落ち込み状遺構

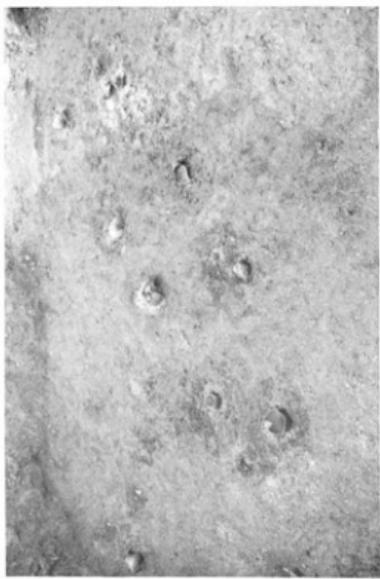
圖版 7 第2地區



1. 張生土器出土狀況



3. 張生土器出土狀況



2. 張生土器出土狀況

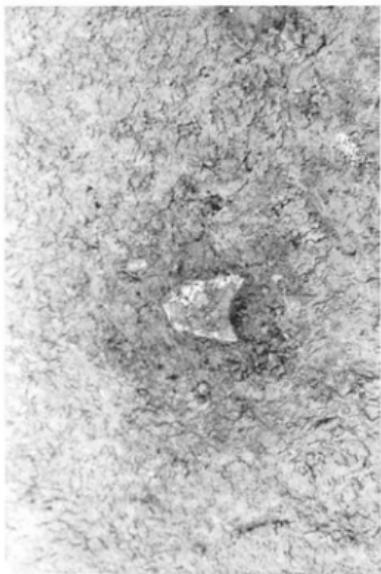


4. 張生土器出土狀況

図版 8 第2地区



1. 銅鏡出土状況



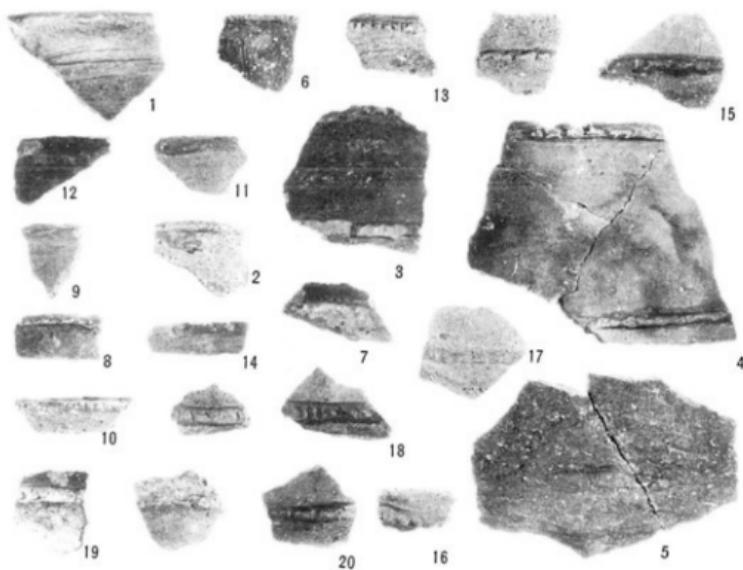
3. ピットNo.5 弥生土器出土状況



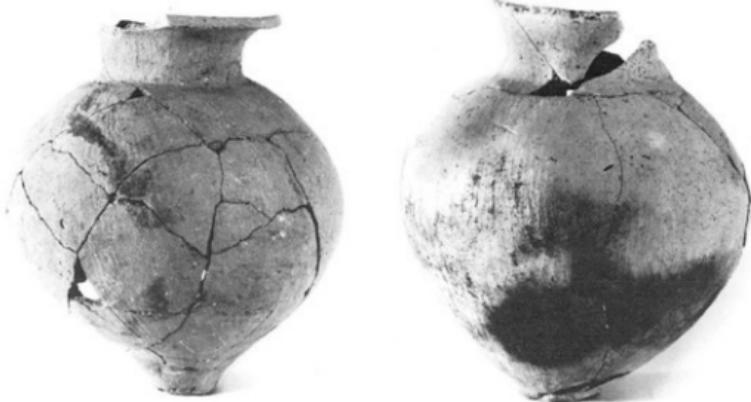
2. 銅鏡出土状況



4. 弥生土器（長頸壺）出土状況



繩文土器、弥生土器



22

21

弥生土器壺 b

弥生土器壺 b



29



24



30'



25



30



23

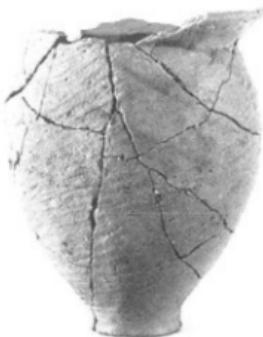
弥生土器壺 b 、長頸壺



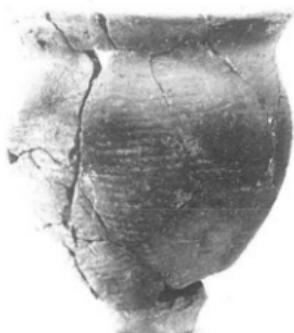
43



40



44



41



45



42

弥生土器表 a₁、a₂



34



37



33



32



58



46

弥生土器甕 a₂、土製台、器台



56



57



52



63



65



62

弥生土器

鉢C、鉢d

土師器

甕、小型器台、鉢

鬼塚遺跡発掘調査概要 I

発行日 昭和 53 年 3 月 31 日

発 行 東 大 阪 市 教 育 委 員 会

印刷所 株 式 会 社 じんのう